

平成 21 年度 岩手県農業研究センター試験研究成果書

区分	指導	題名	平成 21 年産 大豆の生育経過の概要と特徴	
[要約] 平成21年産大豆は、播種も適期に行われ、県中南部では、初期生育は良好であったが、7月下旬から8月上旬の少照により主茎長が平年よりやや長くなった。9月の天候が良好であったことから登熟が順調に進み、全般に大きな諸障害の発生もなく、収量は123kg/10a、1等比率は44.4%と平年をやや上回った。また、湿害回避技術導入面積が拡大した（1,431ha、前年比117%）。				
キーワード	大豆	作柄		○技術部 作物研究室 県北農業研究所 作物研究室 環境部 病理昆虫研究室

1 背景とねらい

県内における大豆の生育・作柄等に関する調査・情報を取りまとめ、その概要や特徴を整理し、今後の技術対応の資とするため取りまとめる。

2 成果の内容

(1) 生育経過

播種が適期に行われ、適度な降水があったため出芽は良好であった。県中南部では、6月下旬から7月中旬にかけて高温で経過したことから初期生育は平年を上回り、開花期は平年よりやや早く達した。また、7月の多雨により、一部の圃場で湿害がみられた。8月下旬に最高気温及び最低気温が平年を下回り、生育が一時緩慢となったが、登熟は、9月の天候が多照及び少雨であったことから順調に推移し、成熟期は平年より7日程度早かった。

県北部では、6月の低温及び少照により生育量は平年を下回り、7月下旬から8月上旬にかけての低温・少照により生育は停滞し、開花期は平年より5日程度遅かった。登熟は期間を通して日照時間が平年を上回ったことから、順調に進み、成熟期は「ナンブシロメ」で平年より3日程度早かった。

(2) 収量及び収量構成要素

県中南部では、主茎節数は平年並であり、分枝数は平年をやや上回ったが、7月下旬から8月上旬の少照により主茎長が平年より長かった。県北部では、初期生育が平年を下回ったことから主茎長は平年より短かったが、分枝数及び稔実莢数は、平年並から平年をやや上回った。

県北部及び県中南部ともに全般に大きな諸障害の発生もなく、収量は123kg/10a、1等比率は44.4%と平年をやや上回った。

(3) 湿害回避技術

湿害回避技術の普及面積が1,431ha（前年比117%）まで拡大し、全作付面積の約30%にまで達した。

3 成果活用上の留意事項

全県での活用を対象としているが、気象および生育経過等は作況試験を実施している北上・軽米の調査結果を基に作成している。よって一部地域や特定の品種では適合しない場合がある。

4 成果の活用方法等

(1) 適用地帯又は対象者等

県下全域の大豆技術指導者、関係機関

(2) 期待する活用効果

現地指導における資料作成の資として活用

5 当該事項に係る試験研究課題

(890) 畑作物の生育相及び気象反応の解明 [H14～H22、県単研究]

6 研究担当者

伊藤信二、小綿寿志、荻内謙吾

7 参考資料・文献

麦類・大豆作況試験報告、病虫害防除実績検討会資料、農作物統計他

8 試験成績の概要（具体的なデータ）

平成21年産 大豆生育経過概要図

